

リサイクルシステム研究会

E-07-18

「リサイクルシステム研究会」は、天竜川水系である伊那谷を舞台として循環型社会のモデルづくりをめざしています。KOAを含むこの地域の企業19社で構成され、企業ならではの実行力と継続力を活かして、リサイクルシステムの構築や環境保全の啓蒙活動を推進しています。

INAコピー用紙循環システム (1999年～)

● 全てのマテリアルのリサイクルモデルとして、コピー用紙に着目

取り組みを検討し始めた1998年当初は、オフィス古紙（コピー用紙）は、機密管理や古紙の市場でのダブつきもあり、ほとんどが自社の焼却炉で処分されている状況でした。リサイクルシステム研究会では、リサイクル社会の到来を見据え、どこでも使っていて少し分別の手をかければ価値が高まるコピー用紙に着目したリサイクルシステムを構築しました。

● 知恵と工夫で「質と量」を確保

コピー用紙だけを集めれば、古紙の区分で「上質紙/中質紙」に位置付けられ、コピー用紙の原料となります。品質の確保には徹底した分別が必要です。禁忌品として指定したカラーコピーやホチキス・クリップ等の金属類が付いた紙などを分別します。さまざまな古紙が混じってしまうと段ボール原料の「板紙」になってしまうのです。発生源である各職場で分けることができるよう、個人ゴミ箱を撤去する工夫などで、手間ヒマをかけずに品質を確保しました。

また、原料として直接製紙会社に持ち込むには、量が少ない問題がありましたが、研究会以外の会社・団体に幅広く参加を呼びかけ、地域全体の取り組みとして量を確保することで解決しました。各々の事業所で分別したオフィス古紙は、毎月1回、地域の回収拠点に持ち込み、研究会メンバーであるリサイクル会社のトラックで回収します。共同回収により量を確保し、品質を徹底したことによりコピー用紙原料としてリサイクルが可能となりました。

● 循環して利用されるコピー用紙

2005年からは回収した古紙を原料の一部に使って製造されたコピー用紙を再び排出した企業/団体に購入するしくみにすることで、循環リサイクルするシステムを構築し、運用を継続しています。



古紙回収量・コピー用紙購入量・参加団体の推移



回収・購入実績(1999～2017年度)

回収量: 約695トン

購入量(循環): 約318トン

コピー用紙の回収量はなぜ減ったのでしょうか

大きく2つの要因が考えられます。情報化の進展により紙の使用量が大幅に減ったこと、個人情報保護法や情報セキュリティに対する社会的な要請の高まりから共同回収システムに出すことのできる古紙が大きく減ったことが考えられます。

古紙のリサイクルの状況

古紙のリサイクルは様々なサービスが増えています。どんな種類の紙でも一括して回収するものや機密文書の処理など方法は様々です。ただし、その分処理業者での分別等中間処理の手間が必要となり、様々な古紙が混ざること古紙の区分も落ちます。

INAコピー用紙循環システムでは、排出側の少しの手間ヒマで価値を高め、さらに循環利用できる社会的にも効率的なリサイクルシステムと言えます。

